

霞

—2012年度秋季展示室だより—

土浦市立博物館

平成24年10月2日発行(通巻第21号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(12~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(21) 絵葉書「土浦名所 土浦亀城公園」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(21)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座、特別公開、企画展他】
- 秋季展示解説
- 平安時代の灯明皿(古代)・・・2
- 雪傳和尚像(市指定文化財)(中世)・・・3
- 最も古い土浦城絵図(近世)・・・4
- 山根八ヶ村のイ草栽培(近世)・・・5
- 霞ヶ浦海軍航空隊の巨大格納庫(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「茨城史料ネット」によるレスキュー活動・・・8
- コラム(21)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

左手に見えるのは茨城県初の国務大臣となった原 脩次郎^{はらしゅうじろう}の銅像、右手は霞ヶ浦海軍航空隊の殉職者の慰霊のために建てられた忠魂碑^{ちゆうこんひ}です。中央に見える瓢箪池^{ひょうたんいけ}の造成と原の銅像の建立は、昭和10(1935)年の亀城公園の大規模整備のときに行われました。【情報ライブラリー検索キーワード「亀城公園」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 「私の考古学五十年」と題し、考古学者としての歩みをお話します

開催日 10月21日(日) 午後2時~(1時間30分程度)

★★特別公開「土屋家の刀剣—国宝・重要文化財の公開—」★★

現在開催中 ~10月14日(日)まで 土浦藩土屋家に伝わった刀剣の名品をご紹介します

★★企画展「亀城公園のひみつ—お城から公園へ—」★★

会期 2012年11月3日(土)~12月16日(日)

・記念講演会 12月2日(日)午後2時~3時30分

野中勝利さん(筑波大学教授)「城址公園の誕生とその背景」(仮)

・土浦二高茶道部によるお茶会 11月4日(日)午後1時~3時

・展示案内会 11月24日(土)・12月16日(日)午後3時~

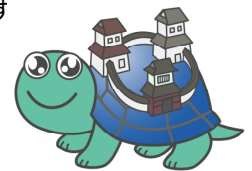
・ミニ写真展「亀城公園の思い出」(常陽銀行ほかにて開催)・土浦城ウォッチング 12月8日(土)

★休館日のお知らせ★ 月曜日(10月8日を除く)、10月9日(火)

★祝日開館します★ 10月8日(月)、11月3日(土)・23日(金)

★無料開館のお知らせ★ 11月3日(土)文化の日、11月13日(火)県民の日

★都合により秋季展示は12月9日(日)までとなります。冬季展示は12月11日(火)からの予定です。



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

平安時代の灯明皿

— 仏への祈り —

土浦市北部の天の川左岸に位置する今泉町根鹿北遺跡では、平安時代前期（9世紀中頃）に作られた小さな堂宇の跡や、そこに安置された瓦塔・瓦堂（「霞」1号「瓦塔・瓦堂」）と呼ばれる素焼きのミニチュア品（推定高 塔：125 cm、堂：45 cm）が見つっています。この堂跡は、間口3間・奥行3間の正方形の掘立柱建物です。建物の北側に浅い溝があり、その中から切り藁が混ぜられた壁土が出土し、土壁の建物だったことがわかりました。また、南側の窪地からは、「佛」と墨書された鉄鉢形土器（「霞」15号「古代の仏具・鉄鉢形土器」）や素焼きの小皿が出土しています。

今回ご紹介する資料は、この根鹿北遺跡から出土した平安時代の素焼きの小皿です。小皿には黒く油煙が付着しており、灯明専用の器と考えられます。油を満たした小皿に、灯心（イ草の芯や綿糸などを用いたもの）を浸して点灯します。仏教の経典では仏塔や仏像、経巻の前などに灯をとすことには大きな功德があると、古くから仏堂や仏壇にはかならず灯明があげられました。日本では、仏教が伝来した飛鳥・奈良時代頃から、灯明皿や蠟燭の灯が仏前に供えられていたようです。

このように、出土した灯明皿は、先の土壁の建物が仏堂だったことを物語る貴重な資料と言えます。仏堂内にはミニチュアの塔や堂（瓦塔・瓦堂）が安置され、その中には小金銅仏や経巻が納められていたのかもしれない。また、仏前には、「佛」と墨書された鉄鉢形土器や灯明が供えられ、仄あかりの中、経文を唱え、仏への祈りをささげる僧の姿が浮かんできます。（塩谷 修）

※関口満ほか 1997『根鹿北遺跡・栗山窯跡』土浦市教育委員会、関口満ほか 1998『第3回特別展図録 仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 をご参照ください。



根鹿北遺跡出土灯明皿（上記図録より）



灯明皿模造品点灯状況（上記図録より）

10/27（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（古代コーナーに展示）

- 根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂
- 根鹿北遺跡出土の鉄鉢形土器



雪傳和尚像 (市指定文化財)

—安土桃山時代の法雲寺和尚—

法雲寺には高峰・中峰・復庵和尚（「霞」2号・16号・17号）の三祖像の他に、12人の歴代住職の頂相が残されています。頂相とは主に禅僧の肖像画をさし、祖師の忌日にその画像を法堂に掛け、その遺徳を偲んだりするのに用いられます。また、修行をつんだ印可の証として、師の画像を弟子に授ける習慣が鎌倉時代以降中国からもたらされました。12人の頂相の中で最も古いのが安土桃山時代に住していた第22世雪傳和尚像で、その他は全て江戸時代以降のもので、また、雪傳和尚以降5代続けて肖像が欠落していますが、第28世三山和尚から明治期の第40世靈戒和尚まで、第35・38世の二人を除くと全て揃っています。弘治元（1555）年の第20世寛翁宗守和尚の時に、法雲寺は佐竹勢の焼討にあい、伽藍と共に頂相を含む多くの寺宝が焼失しています。雪傳和尚は法雲寺開山以来、最も苦難の時期の住持です。一方、寺伝を記した「法雲雜記便覧」には、「二十二世雪傳祖團和尚 大徳派下謹甫（注1）和尚之法嗣巢月（注2）に住す、天正十九（1591）年辛卯より慶長七（1602）年壬寅に到る十一年、祖堂を守看す、故に東照権現公治世之初文禄之檢知に当たりて寺領之訴訟を欠く也、惜べき謀」と記されており、徳川家康の治世において寺領を失ったことが分かります。

肖像画の雪傳和尚は、黒の法衣をまもって竹の曲棹に坐し、両手の袖口を合わせて右手の親指のみを出しています。顔立ちは、下あごが張り、眉毛太く、額に2筋の皺を刻み、目元や目じりに小皺が見られ、黒子や染み、耳穴からは伸びた毛までもが描かれています。また、顔は正面を向いていますが、その眼差しはやや下の方を見つめています。そして不思議なことにその表情は、遠くから見ると穏やかで優しい感じがしますが、近くで見ると何か諭されているような陰しさが感じられるのです。眼も虚ろな感じで何処を見ているか分からないようでもあり、一点を凝視しているようにも見てとれます。あたかも見る側の心のありようによって表情の映り方が違って見えてくるのです。人物をありのまま描いた平凡な肖像画のように見えますが、この絵には禅の思想をも表現されているようです。

大徳寺（京都）121世明叔宗哲（1530～1605）の賛が添えられています。

前大徳見龍翔明叔叟宗哲迅毫
天正十三祀乙酉林鐘中浣日
巢月院常住供養云
小師月堂座元求拙贊書以充
前住徳禅雪傳版首禅師肖像
然無異色百季 東海鉄崑崙 噴
咄々々 眞風難畫以何持論 歴劫坦
鶴望法王頂門 添意魅一黙雷奔
嘉臺猶存巢月 明鑑現道容四來
靈岳上首平諸佛本源 旧規云復
壁嶠高蹤乎 威音行道 身後坐斷
謹甫の子 大模遠孫從前踏躑

〔注1〕

大徳寺96世。万満寺（松戸）の中興開山ともなる。雪傳和尚はその嗣で、万満寺の後も継いでいる。

〔注2〕

小田政治（1492～1548）の菩提寺として建立。



（中澤達也） 雪傳和尚像（法雲寺所蔵）

10/6（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（中世コーナーに展示）

- 三山和尚像（28世）
- 獅林和尚像（29世）
- 佛日和和尚像（30世）
- （以上、法雲寺関連文書）



最も古い土浦城絵図

じょうしゅうつちうらじょうのず
— 常州土浦城之図 —

土浦は江戸時代に整備された城下町が基盤となり、現代まで歴史が刻まれてきました。城下町が誕生したばかりの土浦はどんな場所だったのでしょうか。絵図を見てみましょう。

「常州土浦城之図」でまず目に入ってくるのが城の南東の下沼と南西の上沼、東に広がる霞ヶ浦です。戦国時代末期に土浦城の前身が築かれる以前、この地は桜川がいくつもの支流にわかれて霞ヶ浦に流れ込む低地でした。桜川の氾濫原の、中洲のように自然堤防の上が城の敷地として選ばれたのは、堀や湖沼を防衛の手段としようとしたからでした。この絵図では城を取り囲む田が「深田」と表記されています。街道を通らず、深田を通して城に侵攻するのは困難を極めたことでしょう。「深田」とは、泥が深く、人が足を踏み込めば身動きがとれないような場所でした。道はところどころで大きく曲がっています。曲がり角には敵の急襲するスピードを落とし、通り路を見通せないようにする効果がありました。

土浦城の防衛施設といえば南門手前の「枡形」と北門手前の「馬出し」ですが、この図では広場のようなものが見えるものの、完全な枡形になっていません。土浦城の古記録「土浦城記」によると箕子橋の外側に「角馬出」が造られたのは貞享2(1685)年、真鍋口の馬出しはその翌年のことでした。この絵図には18世紀前半の享保期に整備されたとされる大町や川口町も、まだ形をなしていません。

それでは、この絵図はいつ作られたのでしょうか。残念ながら作成年代が記されていませんが、縦横2メートルを超える大型な図であること、「侍町」「足軽町」などの表記、良質の和紙に厚く顔料が塗られていて出来映えが良いことなど、正保の城絵図との共通点が指摘されています。正保の城絵図とは、正保元(1644)年、幕府が諸大名に命じて作らせた城下町の絵図です。城周辺の建物や堀、水路、防衛施設などの軍事情報



常州土浦城之図 (当館所蔵)

が詳しく描かれています。江戸幕府開府以来40数年、城絵図を献上させることで、幕府は大名の防衛拠点である城の構造や配置などの機密を入手し、支配を一層強めようとしたのでした。

この絵図は当館で所蔵している色川文庫に含まれるもので、江戸時代の国学者色川三申(1801~55)の旧蔵品とされています。本当に正保の城絵図なのか、それとも控図として作られたものなのか、なぜ色川家に伝わったのか、これらはまだ判明していません。

それでも、17世紀半ば以前の城下町土浦の絵図は他に伝わっておらず、もっとも古い城絵図として、この絵図物語ってくれることはとても貴重です。(木塚久仁子)

11/3(土)午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

- 下記の資料もあわせてご覧ください。
- 土浦城模型(近世コーナーに展示)
 - 土浦城記(近世コーナー「城下町の成立」に展示)



山根八ヶ村のイ草栽培

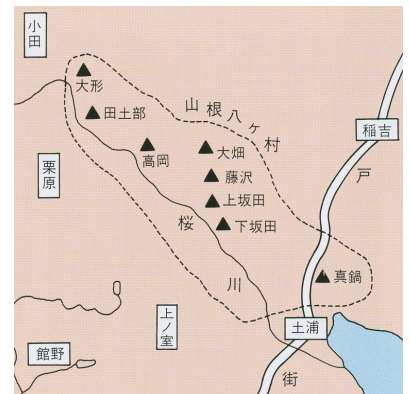
ろうそく
— 蠟燭の芯に適した特産品 —

一般に「イ草」という植物は^{たみおきて}晝表の材料として知られていますが、江戸時代には^{あんどん}行灯の油灯心や蠟燭の芯にも利用されました。灯心草ともよばれたイ草生産の中心は、土浦藩領のうち「山根八ヶ村」にありました。

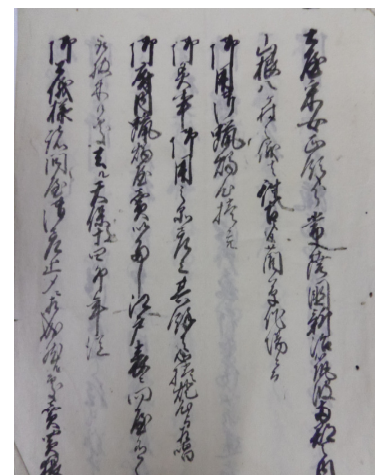
博物館では平成2年に新治村（現土浦市）上坂田の農家の協力により、「イ草・灯心の栽培」という民俗ビデオを制作しました。イ草の栽培には、ヤマ（新治台地）からの「しぼり水」が豊富な「根べった（根岸）」とよばれる地形が適しているそうです。栽培は2回の株分けを基本としています。夏の暑い時期（8月ごろ）に最初の株分けをして苗を植え付け（^{かしよく}仮植）、冬の寒い時期（12月ごろ）に2度目の株分けをして広い水田へと植えつけます（定植）。成長したイ草は7月ごろに刈りとられて農家の庭で乾燥させました。こうして1年近くかけて育てたイ草の皮をはぎ、^{すい}茎の髓（ナカゴやシロとよばれます）をとりだしたものが灯心になります。ちなみにイ草の皮は^{ひみの}日蓑や養蚕の網などに利用されました。

前述の「山根八ヶ村」は、新治郡^{まなべ}真鍋村・下坂田村・上坂田村・^{おおばたけ}大畑村・藤沢村・高岡村・^{たどべ}田土部村（現土浦市）、筑波郡^{おおがた}大形村（現つくば市）のいずれも桜川左岸に位置する村々です。これら8つの村は、宝永2（1705）年に「筑波相馬山方八ヶ村」（筑波郡城中村・相馬郡青柳村など現つくばみらい市・取手市の8つの村）とともに、幕府から燈心草の生産地として公的に認められ、これ以降の生産はこれら16ヶ村に限定されました。

天保15（1844）年の「^{とうしんさくば}燈心作場議定帳」には、山根八ヶ村は水害や日照りの心配があることに加えて、^{たかめん}高免（税率の高い土地）ではあるが、イ草の栽培に適しているため、古くからその生産が行われてきたこと、さらに山根八ヶ村のイ草は「^{ごよう}御用御蠟燭」の芯として幕府に納められる品であることが記されています。また別の史料によると、筑波相馬山方八ヶ村の灯心（相馬灯心）は太くかたいため蠟燭の芯には向かず油灯心となり、山根八ヶ村の灯心（山根灯心）は細くてやわらかいため蠟燭の芯として用いられたそうです。また、山根灯心は相馬灯心よりも軽くて、かさもあるため、蠟燭の芯にすると山根灯心の方が2割ほど余分にできたそうです。山根八ヶ村のイ草が、その品質からも蠟燭の芯として非常に適していたことがわかります。そのこともあって、山根八ヶ村の灯心生産をめぐるのは、宝永2年にその取引を独占する浅草弾左衛門・幕府・蠟燭問屋・土浦藩そして山根八ヶ村の農民たちのあいだで様々な駆け引きがおこなわれました。その歴史については、また稿をあらためてご紹介します。（萩谷良太）



山根八ヶ村の位置
〔図説 土浦の歴史〕より



燈心作場議定帳（個人所蔵）

12/1（土）午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
●民俗ビデオ（情報ライブラリーでご覧になれます）
「イ草・灯心の歴史」
「イ草・灯心の栽培」



霞ヶ浦海軍航空隊の巨大格納庫

—ツェッペリン伯号も格納した大建築—

毎年秋に開催される「土浦カレーフェスティバル」をご存知でしょうか。昭和4(1929)年8月に霞ヶ浦に飛来した飛行船ツェッペリン伯号の乗員ヘカレーがふるまわれたという話をもとに考案された「土浦ツェッペリンカレー」が端緒となったイベントで、土浦の恒例行事として定着しつつあります。ツェッペリン伯号の飛来については「霞」17号で紹介していますが、今回は飛行船を格納した、霞ヶ浦飛行場の巨大格納庫についてご紹介します。

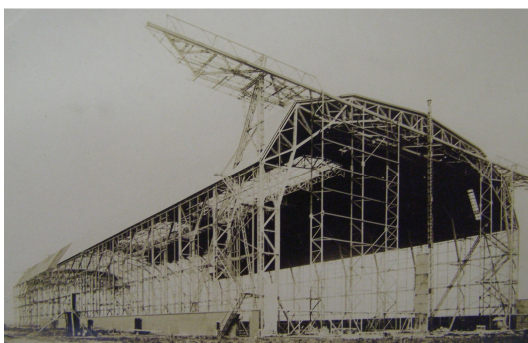
霞ヶ浦飛行場は海軍航空隊の飛行場です。第一次世界大戦での欧米諸国の飛行技術の早期吸収を目的に、大正9(1920)年3月、阿見原(現阿見町)の原野と湖岸を含めて、約86万坪の敷地が確保され、開設工事は着手されました。同10年7月の臨時海軍航空術講習部(後に霞ヶ浦海軍航空隊として独立)の開場式は、5万人が集まる盛大なものだったようです。

巨大格納庫は開場後におかれたものです。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツの賠償物件の一つで、押収格納庫と呼ばれました。日本は大正9年4月に受領し、その後三井物産が解体輸送を請負い、日本に向けて発送されています。解体資材は海路を経て海軍基地のあった横須賀に到着後、海路で鹿島経由、一部は陸路で、荒川沖駅から阿見まで運ばれました。

博物館には組立工事を請負った清水組がまとめた写真帳があります。基礎工事から完成までの12枚の写真絵葉書で構成されたもので、所々に写っている人々は豆粒のようです。東京駅がすっぽり入る程のコンクリート建築は、当時東洋一といわれました。大正11年9月に起工式が行われ、同13年3月に工事は完了しました。当時、組立設計に携わったドイツ人技師リッチマンのサイン入り扇子も博物館で所蔵しています。土浦駅前の料亭山水閣で阿見村の議員宛てに揮毫されたもので、扇子にドイツ語という組み合わせは、町の空気を反映しているようでもあり、当時の雰囲気想像させてくれます。巨大格納庫は多くの見学者を集め、名物建築ともなりました。

格納庫は、建設中の大正12年9月には関東大震災に遭遇したり、昭和2年には地盤沈下で扉が開閉不能となるなどのエピソードもありますが、同4年には全長236.6mのツェッペリン伯号の整備や点検に無事に活用されました。その後も外国機の受け入れなどに利用されましたが、太平洋戦争中空襲の標的となることが懸念され、同18年には解体され役目を終えています。

(野田礼子)



『霞ヶ浦海軍航空船格納庫建築記念写真帖』(当館所蔵)



リッチマンのサイン入り扇子(当館所蔵)

11/24(土) 午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- ツェッペリン伯号飛来を伝える新聞記事(近代コーナーに展示)
- 音楽会入場券(近代コーナーに展示)



市史編さんだより

『土浦の文化財関係史料集』余録 一 小田政治肖像画の賛について

昨年度博物館から標記の史料集を出版した際、小田政治肖像画の賛がよく読めなかったのを、つくば市の井坂敦実先生から ①左から右へ読む ②対句形式 と指摘され、読めるようになりました。

ここで□は字が消えた所、()内は諸橋轍次『大漢和辞典』の用例によって埋めましたが、「ト」のところを長島尉信は「ト乎」と読んでいます。金湯の次は「鞏固」かとも思いましたが、後考を待ちます。

彦博・裴度・霍光・伊尹や圯上は史料集の注を参照してください。参知政は副宰相(執政)、奉車都尉は乗輿を司る役、奏凱は戦勝の凱歌を奏する事、批亢は「批ツレ亢ヲ」で要害の喉元を攻めること、擣虚は「擣ク虚ヲ」で隙(備えのない所)を狙って撃つこと、訓練は教えて熟練させる、斉整はきちんとするの意です。「俊逸空冀北群」は韓愈の「送ルノ温処士ノ赴クヲ河陽ノ軍ニ序」にある「伯楽一たび過ギ冀北之野ヲ而馬群遂ニ空ナリ」を下敷きにしており、伯楽は馬使いの名人、冀北は有名な良馬の産地です。

伯楽が冀北の地を通ると馬が皆いなくなってしまうという故事のことです。その前の句はこれと対句なので、誰かを指していると思われ、「河東の三鳳」という語が浮かびます。その一人薛収せつしゅうは唐の高祖に仕えた天策府記室参軍で、諫めて畋獵てんりょうを止めたという故事があり、この人でしょう。翻は大鳥の羽の意ですから、鳳ふうに相応しいと思います。従って「東」の前は「河」でしょうが、その前は分かりません。

「友直」以下は『論語』の言葉「正しい人、誠実な人、見聞の多い人を友とすれば益がある」という意味です。「左右逢源」は左右前後何れをとっても、達人はその源に行き着くことができるの意です。三十而立は『論語』の言葉です。永正11(1514)年に小田成治が没し、政治が後を継ぎました。寿像を描いた大永2(1522)年、政治は数えて31歳になります。寿像とは生前に描いた肖像画のことです。最後の「足書」以下は黄石公が圯上いじやうで張良に履を拾わせ、その礼に授けた一編の兵法書を指して述べている、と解すべきでしょうか。張良は漢の高祖の天下統一を助けた人です。「一陽来復之日」は冬が去り春が巡り来るの意で、陰暦の11月か冬至を指すそうです。

賛の作者叔悦禅懌は、片野(石岡市)の太田資武すけたけ(三楽斎の子)書状には太田道灌どうかんの甥、系図には道灌の弟とあります。臨濟宗仏源派の殷賢禅彭いんけんぜんほうの弟子で、鎌倉円覚寺150世を勤めました。武蔵国比企郡三保谷養竹院(臨濟宗)の開山となり、足立郡藤浪村の密厳院みつごん(真言宗)を臨濟に改宗しています。のち山内の松嶺院に退居し、天文4(1535)年7月16日87歳で没しました。(市史編さん係・社会教育指導員 雨谷 昭)

源ノ朝臣左京大夫政治法諱長伊 見レレ求メニ壽像ノ賛ヲ
 應不_レ其ノ命ニ云ウ
 彦博ハ其レ宋朝ノ裴度乎 参知政事トテ奏スレ凱ヲ
 霍光ハ蓋シ漢家ノ伊尹也 奉車都尉トテ建ツレ勲ヲ
 摩_レルニ墨ニ以テシ 批亢擣虚ヲ 拆_レニ兵ヲ以テニ訓練齊整ヲ
 □□□ニ河東ノ翻_レ 俊逸空ニ冀北ノ群ヲ
 金湯□□ 日ク禪 日ク教 日ク律
 玉石區別ス 友トシ直ヲ 友トシ諒ヲ 友トス聞ヲ
 左右逢源 三十而立
 トニ菴ヲ畫溪ニ 秋月望ニ築波山ヲ 春雲ノ道通ニ古今ニ
 圯上從來ノ一編 足_下書ハ貴ビニ雄壯ノ筆ヲ 陣ハ獨リ掃_中 千人ノ軍ヲ
 大永二年壬午一陽来復之日
 前ノ圓覺叔悦禅懌

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

ただいま博物館の2階通路で、茨城史料ネットおよび土浦市文化課・市立博物館の被災資料保全の様子や文化財修復の活動を写真パネルでご紹介しています。

◆「茨城史料ネット」によるレスキュー活動

2011年3月11日の東日本大震災は、茨城県内にも大きな被害をもたらしました。沿岸部の津波被害とともに建物被害が内陸部にまで広がり、文化財や歴史資料への影響も広範囲に及びました。このうち指定を受けていない文化財・歴史資料は、震災で傷ついたまま打ち捨てられ、壊れた建物とともに廃棄されてしまうことが懸念されていました。

こうした状況下で同年7月に茨城大学を会場に緊急集會が行われ、「茨城史料ネット」というボランティア組織が立ち上がりました。県内の文化財・歴史資料の被災状況を集約し、廃棄される危険性のある資料のレスキュー活動を展開しています。寺社や旧家の土蔵等から被災した資料を救い出し、応急処置をほどこし、整理・清掃して、もとの所蔵者に返却するという地道な活動です。活動は県内にとどまらず、福島県・栃木県においても展開してきました。

身近な土地や家族の歴史を語る資料を救いだし、保存・公開することは、復興に取り組む地域社会を力づけることにもつながります。
(情報提供 茨城史料ネット)

◆資料保全のお願い

土浦市立博物館でも歴史資料の保全活動をおこなっています。家の記録や地域の歴史を伝える多くの古い文書や記録などは、そのお宅にとっても、地域のみなさんにとっても貴重なものです。紙くずのようにみえるものでも、実際には貴重な歴史資料であることもあります。水に濡れたり、虫に食われたりしても、捨てたり焼いたりせず大切に保管してください。保管や保存でお困りの場合は博物館までご連絡ください。

コラム(21)ー土浦城東櫓が復旧開館ー

東日本大震災で被災し、長らく休館していた土浦城東櫓^{ひがしやぐら}(付属展示館)が7月7日(土)に再オープンしました。地震の直後、壁にたくさんの亀裂が生じ、漆喰^{しっくい}がはがれ落ちた痛々しい姿を見たときの衝撃は今も忘れられません。櫓門(県指定文化財)や西櫓でも同じような被害があり、瓦や鯨鯨^{しやちほこ}の一部も落下しました。復元されて間もない本丸土堀も傾きました。余震による壁や瓦の落下の危険があり来館者の安全が確保できないため、東櫓は長期の休館を余儀なくされました。

およそ半年間にわたった大がかりな修復工事では、壁の塗り直しや鯨鯨の尾の復元などが行われました。東櫓のなかには土浦城で発掘された出土品や土壘を特殊な樹脂で固めてはぎとった断面などが展示されています。地震の揺れで動いてしまった資料もありましたが、幸いなことにいずれも無事でした。建物の修復が完了した後、資料の再陳列がおこなわれ約1年4か月ぶりの開館となりました。復旧した土浦城東櫓にぜひ足をお運びください。(萩谷良太)

情報ライブラリー更新状況

【2012・10・2現在の登録数】

古写真 497点(+5)

絵葉書 404点(+5)

※()内は2012年7月1日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2012年度 秋季展示室だより(通巻第21号)

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

次回の展示は、2012年12月11日(火)~2013年3月8日(金)となります。「霞」2012年度冬季展示室だより(通巻第22号)は12月11日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。